

福 竜 丸 だ よ り

都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会
 〒136 東京都江東区夢の島3-2
 都立・第五福竜丸展示館内
 電話 (521) 8494

第五福竜丸船上の放射性降下物

猿 橋 勝 子

第五福竜丸の船上に降った死の灰の量は、一平方メートルに〇・五から五グラムで、その放射能の強さは、一グラムあたり約一・四キュリーであった。ラジウムの一グラムが、一キュリーであるから、船上に降った死の灰の放射能は、かなり強烈なものであった。

放射性物質の分析は東大の木村・南両教授を中心として、研究室の総力を上げて進められていた。死の灰の本体については、炭酸カルシウムが含まれていることは分っていた。

そのころ私は、三宅泰雄教授のご指導の下に、海水中の炭酸物質の研究を始めていた。当時は微量の炭酸の測定は困難であった。私は微量拡散分析法と呼ばれる方法を適用し、海水中の炭酸物質の測定に成功することができた。

南先生は、私が開発した方法に目をとめられ、三宅先生を通じて、死の灰の分析を依頼された。先生は不破敬一郎博士(現、国立公害研究所所長)を同伴して、私たちの研究室にいらした。私はお二人の前で、緊張して測定の前

備に入った。そして、不破博士から渡された微量の白い粉末試料を丁寧に扱い、測定を始めた。測定を終えて、「炭酸含量は九九・九九%です」と報告したら、不破博士が「よくあっています」と南教授に囁いているのが聞こえた。

つまり、先に渡されたのは、炭酸含量既知の試料で、私は、先ず腕だめしをされたのであった。

ついでいよいよ本番に入り、ケシ粒状の白いビキニ灰の数を渡されて、測定器に入れた。灰の本体は炭酸カルシウムと酸化カルシウムの混合物で、炭酸カルシウムの含量は十一・六%であることが分った。この結果は翌日、東海道線の夜行で京都に運ばれ、京都大学で開かれた日本分析化学会の席上で発表された。

その後、私たちの研究室では、水爆実験の結果生じた、海水中の放射性物質の測定に従事することになった。放射性物質はビキニ海域から、北赤道海流にのって西に流れ、黒潮にのって日本

はかなり強く放射能で汚染されていることが分った。これに対し、アメリカの太平洋岸の海水の放射能は、日本側にくらべて、かなり低く、アメリカの科学者のなかには、私たちの測定は誤りであるとする人が少なからずいた。日本の科学者のなかでも、それに同調する人もいた。

そこで、三宅先生は私を加州大学スクリpps海洋研究所に派遣し、同一の海水を用いて、測定法の相互検定を行なうよう命じられた。私は日本から分析用の機器、試薬等の一切をアメリカに持ち込んだ。分析の対象は放射性ストロンチウムとセシウムであった。スクリpps海洋研究所では、フォルサム博士が、放射性物質の分析を担当していた。

私は毎日、海岸に突き出たピアの先から海水五十リットルを汲み上げ、一種、悲壮な感慨を抱きながら、放射性核種の分析に当たった。その結果は、私たちの分析値は正しく、しかもアメリカ側の方法に比べ、精度の高いことも分った。これで、問題は落着いたばかりか、海洋の放射能の拡散過程が明らかとなったのである。

(第五福竜丸平和協会理事)



署名簿を集計する杉並公民館の婦人たち (1954年)

第五福竜丸展示館を訪ねて

杉並区立公民館 自主講座企画委員
 大 高 節 子

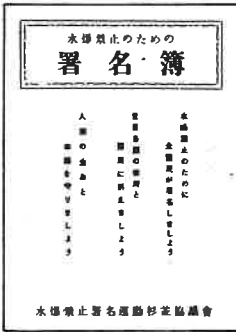
原水禁運動の発祥地であり、その運動の事務局であった杉並区立公民館は、存続の声も空しくこの三月三十一日をもって閉館解体となり消えて行きます。

何度かの変遷をくりながら、「平和と人権」をテーマに公民館自主講座を企画して来た私達は、閉館記念事業の中に、ビキニ水爆実験と第五福竜丸、そして原水禁運動のことを展示しようと、大石又七さんを訪ねて助言をいただき

第五福竜丸展示館を訪れました。原水禁の署名はしていても、この展示館には、知らなかった事実、忘れられた事実が沢山展示されていて、本ものの第五福竜丸やパネルの一つ一つから実に多くのことを学びました。又、それと共に、あれから三十余年を過ぎた今、私達がどんな時代を生きてきているかを、つくづくと思ひ知ることにもなりました。

何よりも心に残ったのは、第五福竜丸の乗組員が、日米戦争の犠牲を背負った人々でありながら、又更に米ソの軍拡競争の犠牲になったということ。近代国家のエゴがぶつかり合う戦争で犠牲を強いられる国民、こんなことは絶対に許せない、と憤りながらパネルを見て廻るうちに、当時の原水禁の署名簿を整理している杉並の主婦達のパネルに出会いました。そうだったのです。この憤りを行動に表わしたのが原水禁運動であったのです。

ヒロシマ・ナガサキからビキニへと、展示館は、核時代の原点がしっかりと存在していました。し



杉並協議会の署名用紙

かし、ビキニから三十余年、日本のヒロシマ・ナガサキから始った核時代はビキニの軍拡競争を通り抜け、スリーマイルやチェルノブイリに見るように、今や日常生活の中にまで一きよに広がっています。まるで世界が核の時代を漂う一隻の第五福竜丸になってしまったよう、人類全体がその乗組員なのです。

一方では皮肉なことに、ヒロシマ・ナガサキ、ビキニ、ネバダでの被ばくを通して、核が人間に与える影響についての知識が蓄積され、そのすべてを人類全体が知らなければならぬ時代でもあるのです。この日、公民館の展示のために、数点のパネルを拝借しましたが、小学生の見学で賑わう展示館を去る時、「杉並の公民館は消えても、核時代の象徴として、第五福竜丸が消えることなく人類の水先案内でいてほしい」と祈らずにはいられませんでした。

二百万の瞳が見つめた

展示館来館者百万名を越える第五福竜丸展示館の来館者がついに百万名を越えました。二月十一日正午すぎ、快晴の土曜日、つぎからつぎへ来館される人々の波の中でした。この日、来館者は三、四七六名。通算百万二、七七八名。予想を早まる「その日」でした。開館以来十三年目、四万名台だった一年目の来館者数を考えると多くの人々の苦勞がしのばれ感無量です。船と共に、核兵器のない未来への新しい出発です。



太鼓をうち鳴らし、南無妙法蓮華経を唱えて、第五福竜丸の周りを一周、久保山記念碑に合掌して出発しました。

二月十二日、日本山妙法寺の「89年3・1ビキニデー平和行進」が展示館から焼津へむかいました。二〇日間通して歩く武田上人はじめ十名のお坊さん、支援の人々約30名が集い、集会のと、うちわ

平和随想 26

三宅 泰雄

第五福竜丸のビキニ水爆被災事件を契機として、その翌年から原水爆禁止世界大会が開かれました。しかし、その後、「核実験部分停止条約」等をめぐって意見が対立し、運動は二つに分れてしまいました。

一九八〇年の国民平和大行進の出発集会で。左、藤井日達師 右、三宅



一九七七年に被爆問題をめぐって大規模な国際シンポジウムが開かれることが決まり、私たちがその準備を担当することになりました。この時、私たちが最も頭を悩ましたのは、原水禁運動の分裂でした。これを憂えて吉野源三郎、中野好夫、上代たの、藤井日達の諸先生によって、「広島・長崎アピール」と題し、原水禁運動の再統一を促す呼びかけがなされ、私もその末席につらなりました。幸いにも世論の圧倒的な支持を背景に、原水協、原水禁の間で、一応の了解が成立し、無事、国際シンポジウムを終えることができました。

私を除く四人の方たちはすでに亡く、「去るものは日々に疎し」の言葉通り、この方たちのこともしだいに世人の記憶から遠ざかってきたように思われます。私にとっては、耐え難いことなので、改めて四人の方たちについて書き残しておきたいと思えます。

集まりの中心は吉野源三郎さんでした。吉野さん（一八九九—一九八一）は東大・文学部・哲学科出身で、若いときから「君たちはどう生きるか」の少年向けの著書で世に知られていました。この本で、吉野さんは当時の軍国主義礼賛の風潮を憂え、平和の尊さを諄々と説いています。戦後、岩波書店から出た雑誌「世界」の編集長となり、安倍能成、大内兵衛の諸先生を中心として「平和問題研究会」を結成し、全面講和を主張しました。その後も、大内兵衛、我妻栄、宮沢俊義らの諸先生と共に「憲法問題研究会」を発足させ、新憲法への理解と定着を進めるなど、終始一貫、平和のために献身してきました。

ケンブリッジ大学で学び、一九五六年から九年間母校の学長でした。上代さんは平和問題にも多大の関心を抱き、「婦人国際平和自由連盟日本支部」の会長として、国際的に貢献しましたし、また一九五五年発足の「世界平和アピール七人委員会」の当初メンバーでもありました。

藤井日達師（一八八五—一九八五）は日本山妙法寺大僧伽山主でした。師は戦後、非暴力、不殺生、非武装を唱え、ひろく宗教者に平和憲法の擁護をよびかけました。原水爆禁止等の平和運動にも一山の僧侶を率い、その先頭に立ちました。師はまた各国を行脚し、平和の願いをこめて外国各地に仏舎利塔を建立してきました。インドのネール首相とも親交があったと聞いています。日本山妙法寺では毎年、原水爆禁止世界大会の開催前に、第五福竜丸展示館の前から、会場に向かって数ヶ月の行脚の旅に出ることを、大切な年中行事の一つとしてしています。師は百才の長寿を保ち、惜しくも四年前に亡くなりました。

私も生のある限り、これらの先達の示した道の跡を、ひたすらに辿って行こうと、心に決めています。

生活の中に生きる第五福竜丸

飯塚 利 弘

私たち焼津の教師は「原爆許すまじ、分裂許すまじ」と一貫して平和運動の統一を求める「静岡の心」を平和教育の心とし、焼津の子らの生活の中に「第五福竜丸」「ビキニ事件」を生かし、生きる力にしようと実践しています。その一つ（中学校の実践）を紹介しましょう。

いじめからの自立と「第五福竜丸」

中学一年生。道徳の授業で「生命の重み」をとりあげた。一九五四年焼津の教師たちが作製したスライド『死の灰』を観た生徒たちはとても感動し、「今の人達は、僕も含めて平和にボケており、こうした現実をしっかり目を向けないで流されているからこわいと思う」と発言した。そこで「平和ボケ」を克服するため、冬休みに自分たちの足で調べて、「第五福竜丸・ビキニ事件」のレポートを書くことにした。父母にも全面的な協力を呼びかけた。このレポート

づくりの中で一番大きな役割を果たしたのが久保山愛吉さんの未亡人です。次々と訪れる中学生達に「僕はいやな顔一つしないで、繰返し繰返しその質問に答えて、三・一ビキニ事件のこと、夫愛吉さんの死、原水爆は絶対許してはいけないこと、平和の大切さ、を話してくれた。中には父母と東京夢の島の第五福竜丸展示館まで出かけた生徒もいた。

生徒たちはそれぞれレポートをつくり、冬休み明けに、レポート発表会を開いた。みんな久保山すずさんにお礼の手紙を書いた。ある生徒は「僕にとってこのレポートづくりは大冒険でした」と書き、ある転校生は「焼津へ来てよかった。生命の大事さも覚えられなかった。この焼津でなければできない勉強をしたからです」と書いた。焼津港からは大漁旗を掲げて専用船が太平洋へ乗り出して行く。「太平洋は今汚されていないだろ

うか。豊かな資源を育てる平和な海になっていくだろうか。生徒達の目は太平洋へ向けられた。さっそく太平洋についての学習が始まった。テキストは三・一ビキニデーでの前田哲男氏の講演記録『第五福竜丸とともに水爆被災をうけたマイクロネシア被災民は今、死の灰』でよごされた魚の宝庫太平洋は今』であった。「ビキニ事件は三

十数年前の出来事ではなく、現在の出来事であり問題なんだ。生徒達は怒りをもってそう捕えた。更に学習を深めた生徒たちは「非核・独立の平和な太平洋を望む太平洋諸国の皆さんへ」連帯の手紙を書き合った。そしてビキニ水爆実験が「風向き変化無視の強行」であることを知り「アジアの民族に対する差別だ」と一層怒りを燃やした。

久保山すずさんの話に感動し、風向き変化無視のビキニ水爆実験強行に怒りを燃やした生徒達。しかし彼らの間にはゲーム化を含めて陰湿ないじめが進行していた。身近かな差別に怒りが向かなければ、本当の平和教育ではない。私はビキニ事件の平和教育と併行して、いじめや授業三悪の克服運動

をすすめる。これらが生徒達の中で統一的に掴まれていくように意図しつつ実践を進めた。そしてその一つの統一が「被害者である自分、加害者である自分を平和主義の観点で明らかにするいじめ白書」であった（これらの作文は「わが子は中学生」誌に掲載され全国に紹介された）。「遊びでも、他人を傷つけることがいけないということを知りました。これを止めなければ、太平洋の水爆実験に反対することなんかではしません」と生徒は書いた。

「くたばりぞこない」と呼ばれ常にいじめの対象にされたK男は、自分も大国に負けず、非核憲法を守っているベラウ共和国のように自立しなければと頑張った。中学二年になったK男は「ばくと三・一ビキニ」と題する論文を書いた。「僕が感激したのは南太平洋のベラウ共和国の非核憲法です。あのような小国でこんなに画期的な憲法を發布できるとは、それを米国等大国につぶされず守り抜いているとは正に信念だと断言します」。そしてそれは自立への彼の信念でもあったのである。

(焼津市立港中学校教員)